



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2015, No. 38

【役員名簿(2014-2016)】(五十音順)

代表：管 啓次郎 (明治大学)
副代表：結城 正美 (金沢大学)
顧問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長：高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
事務局補佐：
辻 和彦 (近畿大学)
浜本 隆三 (福井県立大学)
会計：相原 優子 (武蔵野美術大学)
平塚 博子 (日本大学)
監事：上岡 克己 (高知大学)
ニュースレター編集委員：
浅井 千晶 (千里金蘭大学)
巴山 岳人 (和歌山大学・非)
村上 清敏 (金沢大学名誉教授)
会誌編集委員：
小谷 一明 (新潟県立大学)
木下 卓 (愛媛大学名誉教授)
黒崎 真由美 (関東学院大学)
波戸岡 景太 (明治大学)
John Rippey (滋賀県立大学)
コンピューターセンター：
岩政 伸治 (白百合女子大学)
北国 伸隆 (明治大学・院)
山城 新 (琉球大学)
評議員：Bruce Allen (清泉女子大学)
池田 志郎 (熊本大学)
石幡 直樹 (東北大学)
太田 雅孝 (大東文化大学)
茅野 佳子 (日本大学・非)
塩田 弘 (広島修道大学)
高橋 龍夫 (専修大学)
高橋 勤 (九州大学)
高橋 昌子 (三重大学)
巽 孝之 (慶応義塾大学)
豊里 真弓 (札幌大学)
中川 僚子 (聖心女子大学)
林 直生 (滋賀大学)
横田 由理 (大東文化大学・非)
吉田 美津 (松山大学)
院生代表：山田 悠介 (立教大学・院)
広報：喜納 育江 (琉球大学)
河野 千絵 (日本大学・非)
松永 京子 (神戸市外国語大学)
研究助成：岡島 成行 (青森山田学園)
乳井 昌史 (早稲田大学)
野田 研一 (立教大学)
山里 勝己 (名桜大学)
管 啓次郎 (代表)
結城 正美 (副代表)

水音で始まる

代表 管 啓次郎 (明治大学)

水音で始まることが意外だった。海辺の音ではない、山、山奥。濃い緑の森に湧く水か、小さく速い水流の音だ。そのことの意味は、しかし映画を見てゆくと、しだいに明らかになった。しかも明らかになった意味は、ある大切な認識を、たしかかな手応えをもって伝えてくれた。

映画のタイトルは『赤浜ロックンロール』(小西晴子監督、2014年)。岩手県上閉伊郡大槌町赤浜地区での、巨大防潮堤建設計画に対する住民たちの反応を主題としたドキュメンタリーだ。この問題には興味があった。4年前の震災後、三陸沿岸全体にわたるそんな防潮堤の建設計画を初めて耳にしたとき、悪い冗談だと思った。海に住み、海で働きながら、目のまえの海を視界の外に追いやり、それに背をむけて暮らす？ ヒトという種がみずから家畜化し、与えられた環境をむりやり改変して住みつくことを得意にしているのは、いまさらいうまでもない。だが海岸に暮らして海から目をそらし、川べりに暮らして川をコンクリートで固め、森に暮らして木々を回復不可能なまでに伐採し、湖畔に暮らして湖を湖沼の生物が住めないほどに汚染する、そんな過去100年ほどのやり方は、どう考えてもやりすぎだろう。



(奥尻防潮堤)

巨大防潮堤とはどんなものかを見たかったのは、2012年秋のある日、北海道の奥尻島にむかった。1993年の地震で200名あまりの住民が亡くなったこの島は、その後、驚くべき壁を作って、海と村を分断した。その防潮堤は島における津波対策のモデル・ケースとされ、各地から人々が見学を訪れる。三陸にもそのようなタイプの防潮堤が作られるというのだ。奥尻島の現地に行き、あっけにとられた。堤の内陸側を歩けば、海は世界の反対側のように遠く感じられる。逆に海側を歩けば、浜を失ったよそよそしい海が、いかにも人間を拒絶しているように感じられる。島の暮らしは海とともにあるのではなかったのか。その分断は、人間社会を分割する種々の壁以上にグロテスクな、あるいはオブシーンなものだと思えた。オブシーンとは、つまり「舞台上に載せられない」ということ。ヒトが自分たちの暮らす土地という舞台上で十全に生きようとするとき、この壁はそこにそびえたちながら、何食わぬ顔で自分の存在をなかったことにし、海を海に閉じこめ、ヒトを陸に閉じこめる。両者の交渉は、あるいは交感は、忘れられる。



1000年に一度の大津波に襲われた三陸の長い沿岸に暮らしてきた人々は、これから海とどうつきあってゆくのか。映画『赤浜ロックンロール』は赤浜という集落を例にとり、特にふたりの人物に焦点をあてながら、この問いを考えようとする。まず阿部力、漁師。新おおつち漁協組合長にしてロック好きの青年。遠洋漁業から沿岸漁業、そして若布・昆布・牡蠣・海鞘などの養殖へと方針を変えてきたこの土地の漁業の歴史の、現在における担い手だ。弟の守とともに毎日海に出て、煙草を吸いながら黙々と働いている。震災後、若手のかれらが真っ先に立ち上がり仕事を再開したことに対して、たとえば鮮魚店主は賛辞を惜しまない。カメラは海に生きるかれらの生活を、淡々と追う。もうひとり川口博美、住民の自治組織「赤浜の復興を考える会」会長。国と県が提示した14.5メートルの高さの防潮堤建設計画を断固として拒否する人々の代表だ。その後、話が持ち上がった、高さ11メートルの町道建設にも強く反対する。その理由は、要するに、そこにある海が見えなくなることの拒絶だ。海辺に住み、海を

見て暮らし、海が危険をもたらすときにはその海の変化に機敏に対応して行動すればいい。子供たちもそんなふうに育てればいい。彼は母、妻、孫を津波で失ったが、それでも浜に対する愛着は変わらない。海への愛着は、阿部兄弟の母親、京子にも強い。海があるから大槌に住んでいる、海がいないなら盛岡でもどこでも行けばいい。そしてもちろん、かれらの気持ちは他にも多くの住民が共有しているはずだ。かれらはみんな、高台に作られた仮設住宅で暮らす。

津波により破壊された三陸の長い海岸線では、空前絶後の大規模な土木事業が進行している。陸地と海を壁で分断する。山を崩し、土地をかさあげする。ごくあたりまえに考えてみよう、これは狂気の沙汰だ。そこまでやらなくてはならないのか。なぜ、ありのままの土地の姿を大切にしようとししないのか。巨大計画のすべてが、どこか嘘くさく、怪しい。それを怪しいとも思わない人々のほうが多いから、そんな計画が進行するのか。いや、そうではないだろう。それぞれの土地の住民たちの意志とは無関係に、どこかで何かの図面が引かれ、それを実現するための力が結集されている。人々の意見が多様になればなるほど、最大公約数として競り上がってくるのは、そんな事業が落としてゆくお金以外のものではないだろう。だが安全は、生存は、生活は、別のあり方を探れるはずだ。

そしてこのドキュメンタリー映画は、防潮堤への反対が単なる景観をめぐる美学や生活上の趣味の問題ではないことを、的確に指摘している。巨大構造物は風景をオブシーンにするのみならず、水そのものの流れを断ち切るのだ。かれらが暮らす湾はなぜゆたかなのか。それは山の水がゆたかな栄養素を含んで海へと流れこむからだ。フルボ酸鉄の重要性を早くから説いたのはおなじ三陸・唐桑で「森は海の恋人」運動を展開する牡蠣漁師の島山重篤だったが、この映画には海底湧水の調査をつづける総合地球環境学研究所の谷口真人が登場する。森に発する小川は、さわやかな水音を立てて地表を流れるのみならず、地下を伏流し、そのまま湾の海底のあちこちで湧き出すのだ。この視点はぼくにはなかった。巨大構造物は、地表の景観のみならず、地下の水系をも分断するだろう。土地の水系を考えるとなく巨大構造物を作ろうとする発想自体が、無用のダムを造り川を殺してきた20世紀の、悪しき遺産だ。

地形の最大の造形者は水だ。その真理は変わらない。川と海が出会うところは、浜であれ湿原であれ、われわれを生命に覚醒させてくれる。海辺、平野、山地のどこを生活の場として選ぼうと、われわれは水の流れを手がかりとして、土地の運命を考えることができる。そしてヒトの生活は、土地の運命によく寄り添うことがなければ、いかにもつまらないものになっていくだろう。

【開催のお知らせ】

2015年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会**(2015年8月22日[土]～23日[日]@安藤百福自然体験指導者養成センター
[長野県小諸市])**

茅野 佳子(日本大学・非)／河野 千絵(日本大学・非)

本年度の全国大会は、昨年の沖縄の海辺とはがらりと変わって、浅間山に近い長野県小諸市で開催されます。大会開催委員のお二人に、開催地や大会の予定についてご紹介頂きました。

8月22日(土) 23日(日)に、安藤百福自然体験指導者養成センター(通称:安藤百福センター。長野県小諸市)において全国大会を実施いたします。大会の詳細は同封資料をご覧ください。ここでは、会場となる小諸市と安藤百福センター、及び基調講演の講師をご紹介します。

長野県の東部に位置する小諸市は、浅間山を望み、四季折々の変化に富む自然豊かな町です。JR小諸駅近くの懐古園(小諸城址)には、観光客の方はもちろん、格好の散策の場として多くの市民が訪れています。近年は街中の歩道整備が進み、町屋や蔵を利用したイベントが季節ごとに企画され、歴史のある風情を生かした町づくりが進められています。また、この地方は果樹栽培に適した土地柄で、リンゴや桃、プルーンやブルーベリーが作られています。

安藤百福センターは、小諸市郊外の、浅間連峰が一望できる高台にあります。50年ほど前までは、「箒の先を空に向けて振ると、星がざらざら落ちて来そうな」ほどの満天の星空が見られたと、土地の方はおっしゃいます。その夜空は、現在では少し輝きを失ったかもしれませんが、静かな夏の山の時間をご一緒できましたら幸いです。残念ながら、時間の関係上、今回はフィールドトリップを日程に組み込めないのですが、安藤百福センターの周辺には、トレイルのコースや遊歩道があります。大会2日目の早朝や、閉会后、もしくは初日の午前中などに、夏草の香りや山の風を楽しみながら、散策をなさってみてはいかがでしょうか。ご希望の方には、ご案内を差し上げますので、どうぞお申しつけ下さい。

基調講演の講師は、動物学者で著述家の今泉吉晴さん(都留文科大学名誉教授)にお願いしました。今泉さんは、1940年東京生まれ。山梨や岩手の山林に山小屋を建て、植物の手入れや畑づくりをしながら、モグラ、野ネズミ、リス、ムササビなど、森の小さな動物たちの観察・研究を続けてきました。『ムササビー小さな森のちえくらべ』で日本科学読物賞を、『シートン動物誌』(全12巻)で日本翻訳出版文化賞を、評伝『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』で小学館児童出版文化賞を授賞。訳書には、ヘンリー・D・ソロー『ウォールデン 森の生活』や完訳版『シートン動物記』(全15巻)があります。現在岩手県花巻市東和町土沢に住み、野生動物の研究を続けながら、執筆やお話会を行っています。

昨年、紅葉の美しい季節に土沢を訪れ、今泉さんが

13回に渡って実施した「シートンお話し」の最終回に参加する機会がありました。海外や国内の手仕事の品を扱うお店「にっち(Niche: 生きもの特有の生き方、くつろげる場所という意味)」にシートンに関する展示コーナーを設け、シートンの生き方を伝える「お話し」を企画されたのです。最終回のタイトルは、「私の本は人格の表現」(『シートン動物誌』第4巻の「完結のときにあたって」のシートンの言葉)でした。「人格の表現」とは自分の科学、学問という宣言であり、自らの関心を追求したこの大著が、シートンを誤解し批判する人々への明確な解答となっていることを話してくださいました。このことについては、講演のときに詳しくお話いただけるそうです。



(地元のお話会でシートンについて話す今泉吉晴さん
[撮影: 茅野佳子])

今泉さんによる基調講演は、「環境」と「文学の表現」に深い関心を寄せるASLE-J会員にとって貴重なひとときとなることでしょう。どうぞご期待ください。また、今年度の全国大会には動物をテーマとする研究発表の応募が複数あり、管啓次郎さん司会によるシンポジウム「動物のいのち」の企画もあり、一日目の午後のセッションは「動物特集」となりそうです。詳しくは、大会プログラムをご覧ください。

*安藤百福センターのホームページ
<http://www.momofukucenter.jp/>

【書評】

<ASLE-J20周年記念出版>

『文学から環境を考える—エコクリティシズムガイドブック』

小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編(勉誠出版、2014)

野田 研一(立教大学)

ASLE-J20周年を記念して昨年出版されました『文学から環境を考える—エコクリティシズムガイドブック』はもう手に取られましたでしょうか。内容の紹介およびその位置づけについて、野田研一さんに寄稿して頂きました。

学会20周年記念出版という位置づけのもとで刊行された本書は、まさしく20年という時間の意味を思考している、という印象を強く残す書物である。「草創期」と呼ばれる時期に学会の設立に関わった者のひとりとして、この20年という時間を思考する、かくも真摯さきわまりない書物と向き合えることを喜びたい。また、表だっては見えないが、本書企画の提案当時、学会代表を務めておられた村上清敏氏の真摯さをも思い、改めて感謝の意を表さずにはいられない。

もちろん、この20年という時間のすべてを、執筆の中心を占める若手研究者の方々のご存知の**はずはない**。にもかかわらず、20年という時間の意味を**思考している**と感じるのは、「あとがき」における編集代表・小谷一明氏の述懐にあるように、執筆者たちが、「第一世代の研究」の「継承・発展」というテーマに「向き合う必要にせまられ」、「その問いに対する応答」を提示した書物なのだという、本書の明晰な位置づけに負うところ少なくないであろう。ASLE-Japanはわずか20年の歴史しかもたない若い学会である。エコクリティシズムという学問分野じたいがきわめて若い。このことは困難を招来する場合もあるだろうが、それよりもはるかに重要なのは、可能性に充ち満ちているということである。たとえば、アメリカの名だたるエコクリティックによる第3部「『環境文学』で世界をつなぐ」を読んでみればよい。エコクリティシズムの展開過程がつぶさに、かつ、じつに整然と要約されている。

続く第4部「キーワード30+1—より理解したいあなたへ」は、若手研究者を中心にしながら、ベテランが巧みにサポートする、力の籠もった解説が並んでいる。この第4部こそ、本学会における「継承・発展」という問いへの具体的応答にほかなるまい。もっとも、入門書・教科書的な記述に主眼が置かれているため、かならずしも独創的だと思えないのはやむをえないのだろう。その代わり、過不足のない「入門」を保証してくれる。同時に、これらのキーワードには20年の時間が産み出した問題の所在も刻印されている。20年前には存在しなかったキーワードが含まれているからだ。

たとえば、「映画」、「エコロジカル・アイデンティティ」、「汚染の言説」、「環境詩学」、「環境人文学」、「クィア・エコロジー/クィア・エコフェミニズム」、「平成文学」、「ポストコロニアル・エコクリティシズム」、「マンガ/アニメ」、「ユートピア/

ディストピア」、「エコサイド文学」などが否応なく目につく。ここには広がりつつあるエコクリティシズムの視野がうかがえる。ジャンルを超える、ディシプリンを超える、メディアを超える、従来とは異なる概念と結合する、逆に既存の概念との結び直しを試みる、など、キーワードにはいわば躍動が見える。いまこれほど展性に富む批評の領域は少ないと実感する。

いっぽう、日本のエコクリティシズムは、2011年3月11日の東日本大震災を経験した。その点では、相当に大きな負荷がかかっているはずで、その経験を本書も反映している。キーワードにおける「平成文学」や「エコサイド文学」といった概念の導入も、そうした問題意識とどこか深く結びついているだろう。また、第2部「『文学』から見つめ直す環境」のセクションに収められた5編の論文に、破壊、災害、死、神話、怪物など、ある種の否定性や恐れを主題化しているような共通性を感じるの**は深読みではない**と思われる。

「現代社会の日常的風景を襲う破壊に抗おうとしている」(塩塚秀一郎氏)、「私たちを取り巻いている自然・環境・テクノロジーの政治学」(中垣恒太郎氏)、「自然観がゆらぐと、死後の世界観にも変化が生じる」(浜本隆三氏)、「近代的手法で示された近代の終焉」(芳賀浩一氏)、「人と人にあらざるもの、生と死の境界の恣意性を暴く」(中川僚子氏)といったそれぞれに印象的な発言は、根底で〈死〉という自然を見据えている。

結城正美氏による「はじめに—日本のエコクリティシズム」は、20年にわたる「思考の時間」を三つのステージに分けて考察している。そして、その三つ目のステージとは、〈日本のエコクリティシズム〉(Japanese Ecocriticism)であるとして、ルビまで振って強制的に定位されている。ほかならぬいまでと強く私たちに迫っているのだ。「〈日本のエコクリティシズム〉に向けて、環境文学、環境史、日本文学、日本史、生態学、地理学、文化人類学をはじめとする多くの分野の対話が今後ますます求められる」という氏の指摘には二重の意味が籠められていよう。日本独自のエコクリティシズム確立への誘い(たんなるエコ・ナショナリズムに陥ってはならないが)と、分野横断的な研究交流へのうながしである。まちがいなく、私たちのいまを指し示す重要な指摘である。

【エッセイ】

—「欠食」時代の養生、「崩食」時代の保養—
保養で子供を守るべし

趙 菁(金沢大学)

福島第一原発事故による内部被ばくの問題は、その影響がはっきりしていないにもかかわらず、次第に議論されなくなっているように感じます。江戸時代以来の「養生」と「保養」の思想の観点から、趙菁さんにエッセイを寄せて頂きました。

享保7年(1722)1月21日、一人の町医者が動き出しました。

小川笙船という長屋住まいの町医者が一通の意見書を目安箱に投函し、幕府に施薬院の設置を求めました。「江戸に住む極貧の病人は大変悲惨な状況にいて、重い病気にかかる身請け引受人はろくに看病しない非道の者が多く、また、知り合いや縁者のいない者、妻子がいない者が病気にかかると、見殺しにされてしまう事例が多い」と理由を挙げ、幕府に公的な救済を求めたのです。幕府はこの提案を受け入れ、一年後に施薬院が開設され、当時の将軍徳川吉宗が小石川養生所と名付けました。幕府は養生所に医師、看護婦、事務担当者を配置し、病人・怪我人の急増に鑑み、財政難の下でも、入所定員を増やす努力をしました。例えば、1729年に養生所の定員数を100人から150人にまで増やし、入所期間は20か月としました。小石川養生所はつまり、江戸幕府が町に設置した無料の公的医療機関でした。後に江戸時代の終焉に伴い、小石川養生所は幕を閉じましたが、約150年にわたった活動が、幕末の諸藩や民間による養生所の設置に、大きく貢献したことはいうまでもありません。

大正時代、養生所に代わって保養所が登場しました。例えば、当時最も保養所が群生した京都と石川には、それぞれ14か所の保養所がありました。これらの保養所は民間人によって設置され、養生所のような貧困者の救済治療に加え、健康増進を図ることを強調し、主に有効な治療法が確立されていない、例えば、精神病、ハンセン病、結核などの病人に対し、病人の自然治癒力に期待した栄養療法なども行った施設でした。

そもそも、「養生」と「保養」は同じカテゴリーの言葉です。『大漢和辞典』によると、「養生」とは「生命をやしなう。長寿を保つようにすること。健康の増進をはかること。衛生に力を盡すこと。」、そして「保養」とは「身体を健やかにたもち養う。またそのこと。養生」とあり、そして貝原益軒の『養生訓』(1713年)によれば、「身つよく長命に生れ付たる人も、養生の術なければ早世す。虚弱にて短命なるべきと見ゆる人も、保養よくすれば命長し。」とあるように、保養は養生の一部分とも、または養生に相当するものとも考えられます。

養生文化が最も開花した江戸時代において、養生という名称は最も人々の健康と医療への強い関心と要求に応える名称です。一方、大正時代になると、江戸時代の養

生所的な役割を強調せず、保養所が病気や貧困を想起させない療病施設として営まれていました。そして、大正時代に設置された保養所は法的な裏付けを持たない施設として冷遇され、さらに戦後の食糧難の打撃を受けて衰えていったのです。

しかし、今、日本に新たな保養所が動きだしています。これは福島や放射能に汚染された地域の子供たちを守るための保養所です。

「21日間、環境への汚染が少ない場所で、汚染の少ない食べ物を食べるという「保養」により、原爆事故で被ばくした子供たちの体内に蓄積された放射性物質を排出させることができ、内部被ばくの数値が2分の1以下になる」。チェルノブイリ事故があったベラルーシのベラルド研究所のこの調査結果が、いま、ドキュメンタリー『小さき声のカノン—選択する人々』(鎌仲ひとみ監督)を通して日本の人々に伝えられています。そして、日本に保養活動及び保養所が立ち上がりつつあることも、紹介されています。ただし、ドキュメンタリー中でも指摘されているように、日本で行われている保養はリフレッシュ或いはストレス解消のためのもので、放射性物質を体外に排出するために十分な期間に行う加療はほとんど始まっていません。また、日本の保養所は市民のボランティアであり、ベラルーシのように政府と民間が連携し、定期的に子供たちを汚染地から海外保養へ送り出すといった手厚い支援には到底及びません。

ほぼ300年前に、飢饉、疫病、災害に苦しむ江戸の庶民を助けるため、江戸幕府は積極的に行動を起こし、小石川養生所を設置し、150年間にわたって庶民の救恤を行いました。その300年後のいまは、江戸時代のような飢饉の時代ではありませんが、食の崩壊、汚染による健康の被害を受けている人々の苦しみは江戸時代と変わりがないように見えます。民間頼りではなく、官と民の共同義務として、保養施設を立ち上げるべきではないでしょうか。汚染から人々を守り、保養できる浄土を提供し、そして守りぬかねばならない時期になっているのではないのでしょうか。

この稿を記しているときに、「NY近郊の原発が火災で停止 安全上問題なしと発表」(5月10日共同通信社)のニュースが目飛び込みました。現代に生きる人々は、日々このような原発や様々な災害に脅かされています。尊い生命を守り、養うには、300年前の町医者小川笙船の行動を、単なる感心だけで済ませてはならないのです。

【ASLE-J Grad Journal (院生組織だより)】

ある日の、ある問い

山田 悠介(立教大学・院)

「文学研究って、いったいどんな意味があるんでしょうね?」

二杯目のワインが進んだ頃、T君が言った。T君は哲学を専攻している大学院生だ。哲学を研究することに一体どんな社会的意義があるのか? もっと露骨に言えば、それは何かの役に立つのか? そうした問いかけをされるのが少なからずあるらしく、どのように応えればいいのか悩んでいるという。文学研究に対しても、同じような問いを突きつけられること、ありませんか? そんなとき、どんな風に応えていますか? とT君は続けた。結局、その日は結論らしい結論が出ないままお開きとなったのだが、これは宿題だなあと思いながら家路についた。

それから数日後、何気なく入った書店で、一冊の本の表紙に目を奪われた。青空の草原を、二人の女の子が走っている。一人は尻を揚げ、もう一人はその後ろをついてゆく。妙だったのは、後ろを走る女の子だ。赤ともピンクともつかないワンピースを着ているのだが、顔が無い。

思わず手にしたその本は、トーベ・ヤンソンの『ムーミン谷の仲間たち』だった(山室静・訳、講談社文庫、2011年)。作者ヤンソンは、1914年の生まれ。2014年が生誕100年にあたることから、去年から今年にかけてさまざまなイベントや特集が組まれていたらしく、その書店の一角にもムーミン関連のコーナーが設けられていたのだ。

さすがにムーミンは知っていたし、その他のキャラクターもいくらか見知ってはいたものの、アニメもマンガも目にしたことはなく、ましてや小説を読んだことなどなかった。改めて表紙を見ると、尻揚げをしていたのは毒舌で有名なミイだった。だが、その後ろの女の子、顔のない子が誰なのか、皆目見当がつかない。どうしても気になったので購入し、行きつけの喫茶店で読むことにした。

『ムーミン谷の仲間たち』には、九つの短編が収められている。解説の富原真弓氏によると、これはムーミンシリーズでただ一つの短編集とのこと。目次を見ると、後ろから四番目に「目に見えない子」という章がある。どうやら、表紙のあの子はこの子のようなのだ、と当たりをつけ、「目に見えない子」から読み始める。

*

ある秋の夕べ。雨のなか、ムーミン一家の家におしゃまさんが訪ねてくる。ニンニという女の子を連れて。

おしゃまさんによると、ニンニは、ニンニのことがちっとも好きではないおばさんに、くる日もくる日も皮肉を言

われて過ごすうちに、やがて「青ざめてしまって、はしのほうから色あせていき、だんだん見えなくなっ」てゆき、とうとう「先週の金曜日には、まるっきりすがたがきえてしまった」のだという(pp. 165-166)。おしゃまさんは、ニンニが再び見えるようになればと、ムーミントロールたちの家に彼女を連れてきたのだった。

ムーミントロールたちと暮らすうちに、ニンニは少しずつ自分の「すがた」を取り戻してゆく。最初は足だけ。次にすねまで。服が見え、首まで見えるようになり、やがて声も出せるようになる。顔だけはいつまでたっても見えてこないが、彼女が(文字通り目に見えるかたちで)回復してゆくのを見ると、ムーミントロールたちに交ってこちらまで嬉しくなる。

クライマックスは、遂にニンニの顔が見えるようになる海辺でのラストシーンだ。それまで、遊ぶことも、笑うことも、怒ることも知らなかったニンニは、海の大きさに驚くあまり涙を流し、ムーミンママにいたずらしようとするムーミンパパに怒って嘔みつき、帽子を取ろうとして海へと転がり落ちたムーミンパパの姿を見て大声で笑う。そして、顔を取り戻す。海の畔で、心が動く。ニンニは、お転婆で、この上なく魅力的な女の子に生まれ変わる。

*

一気に読み終え、顔をあげた。ムーミンママのさりげない優しさが、物語に漂う秋の気配が、まだそここに残っていた。だが何より印象的だったのは、誰かに心を傷つけられた末に、人が透明になってしまうというアイデアだった。そんなこと、現実には起こるはずはない。にもかかわらず、そうした状況に置かれたときに透明になってしまうということが、透明にならざるをえない、という切実な想いが、確かなリアリティをもって胸に迫る。透明になるという非現実的な出来事なればこそ、一層「リアル」に伝わるのが、ある。

このきわめて個人的な読書体験を語ることが、T君が投げかけた問いへの答えになるとは私も思わない。しかし、もしこの圧倒的な文学体験のそのあとで、心と体のつながりや、「顔」の喪失と回復など、物語に散りばめられたさまざまなテーマを、深く真摯に掘り下げていったとしたら。それは、豊かな〈何か〉を生むのではないかと、思わずにいられない。答えは今も見つからないが、今度T君と会ったら、この辺りから話をしようか。

ところで。皆さんなら、冒頭の問いかけに、どんな風にお応えになりますか?

【シリーズエッセイ シネマ×環境(5)】

四ノ宮浩『BASURA バスーラ』

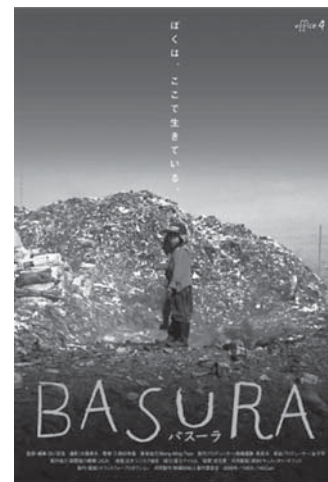
塚田 幸光(関西学院大学)

1989年、フィリピン、スモーカー・マウンテン。日本がバブルに浮かれ、享楽にふけていたまさに同時代、2万のスカベンジャーたちは、生きるためにゴミを漁る。四ノ宮浩が6年の月日をかけて撮ったドキュメンタリー『忘れられた子供たち スカベンジャー』(1995)の光景は、資本主義社会のダークサイドだろう。『神の子たち』(2001)、『BASURA バスーラ』(2009)へと続く、フィリピンの忘れられた子供たちの物語を見ていこう。

「斜面を登っていたら、向こうから、14歳くらいの子供たちが寄ってきたんです。僕は街中の子供たちのようにお金をせびられるのかと思って身構えていたんですよ。しかし、彼らは、まるで登山客同士みたいで、「こんにちは」と挨拶してくれてね。その子たちの澄んだ瞳を見て、何でこんな子供たちがゴミ山にいるのか、と。そのわけを知りたくてドキュメンタリーを撮り始めたのです」。四ノ宮が見た光景は、決して美しいものではない。それは蠅が飛び交い、悪臭に満ち、死体すら転がるゴミの山。マニラの北に位置する東洋最大のスラム、「スモーカー・マウンテン」は、フィリピンの恥部であり、消費社会における欲望の残滓に他ならない。四ノ宮はこの場所に住み、人々の息づかいをフィルムに収める。ゴミの悪臭をシンナーでまぎらわすジェイアール(18歳)。彼と恋に落ちるクリスティーナ(16歳)。シングルマザーのイルミナダ(43歳)は、今を呪い涙する。その傍らには、小学校を辞めて、ゴミ拾いで生活を助ける息子エモン(13歳)。彼は言う、「ここの生活は楽しい」。刹那、我々は奇妙な錯覚を覚えるだろう。フィルムが活写するのは、ゴミと共に生きる「家族」。だが、地べたを這うような彼らの生活は、皮肉にも農村地域よりもマシだというのだ。14歳のマルリーは言う、「ご飯が食べられるから、ここの方がいい」。

1995年11月、フィリピン政府は、スモーカー・マウンテンを閉鎖し、2万の不法占拠者たちの強制撤去を実施する。行き場を失った人々は、近隣のパヤタスゴミ捨て場、通称「スモーカー・バレー」に移り住む。『神の子たち』の舞台だ。2000年7月、映画は、長雨によるゴミ山の崩落事故(千人を超える犠牲者が出る)とそれに伴うゴミ搬入停止をフォローする。ここで興味深いのは、ノーラ(27歳)の産んだ未熟児や水頭症のアレックス(5歳)など、明らかにゴミに起因する「病」を切り取っている点だろう。身体を蝕む「ゴミ」。だが、それほどのリスクに晒されながらも、ス

カベンジャーたちはそこで生きるしかない。事故から数ヶ月後、ゴミの搬入が再開される。その光景は、まさにゴミが「神」に変貌する瞬間に他ならない。トラックの荷台からなだれ落ちるゴミ。それは命を繋ぐ「神」では、「ゴミ」とは一体何なのか。



フィリピン三部作の最後は『BASURA』、『忘れられた子供たち』の後日談である。ジェイアールはジャンクショップで職を得て、クリスティーナと子供たちと一見平穏に暮らしている。だが、ここにも病の影が潜む。子供たちの病気とその薬代の工面。そして、5人目の赤子が被る血液の病。ゴミと病と貧困の連鎖に、クリスティーナは涙する。一方、イルミナダと子供たちはミンダナオ島に帰っていたが、そこにエモンの姿はない。彼は留置所で、自殺したのだと言う。エモンの死の真相とは如何に。四ノ宮のカメラは、フィリピンの悪しき習慣や事実を捉え、「識字」の問題をフィルムに刻む。

三部作において、「教育」の問題は、過剰にクローズアップされるわけではない。スカベンジャーは、ゴミ地獄から抜け出すためのペン／教育という武器を手にする機会がないのだ。四ノ宮はその非情な現実に対して、一定の距離を取り、事実を活写する。マイケル・ムーアのような誇張や演出はない。ドキュメンタリーの基本、対象に寄り添い、距離を取る。だが、その視線は限りなく優しい。

「バスーラ」は、タガログ語で「ゴミ」の意。うずたかく積まれたゴミの前に佇む子供。三部作の子供たちは、ゴミ／神が産み落とした<鬼子>だろう。我々はその事実から目を背けるべきではない。

事務局より

■2015年度ASLE-Japan/文学・環境学会
第1回役員会・例会のご報告

2105年5月9日(土) 明治大学中野キャンパス3階304教室(〒164-8525 東京都中野区中野4-21-1)において第1回役員会が開かれました。まず、審議事項として、2014年度会計報告および監査報告、2015年度予算案の審議がなされ、2014年東アジア環境文学国際シンポジウム会計の余剰金を今後の国際大会の基金とすることも含め承認されました。引き続き、会誌印刷会社選定の結果、左右社に決まったこと、一部役員改選案、全国大会案が審議を経て了承されました。続いて、ニューズレターの発行、現会員数(177名)、「会員書誌情報」更新報告と更なる情報提供についての呼びかけ、院生組織の活動、以上の報告がありました。役員会に引き続き、例会「著者と読む 木村友祐『聖地Cs』」が行われました。司会は、管啓次郎代表によって行われ、参加人数は非会員も含め21名となりました。

■2015年度ASLE-Japan/文学・環境学会
全国大会開催のお知らせ

とき：2015年8月22日(土)～23日(日)
ところ：安藤百福自然体験指導者養成センター
(〒384-0071 長野県小諸市大久保1100番)
*基調講演には、『シートン動物記』(全15巻)『シートン動物誌』(全12巻)の訳者で、『わたしの山小屋日記』(全4巻)等野生動物に関する多くの著書をもつ動物学者、「ムササビ先生」こと今泉吉晴氏を招聘し、知られざるシートンの偉業や野生動物の魅力について話していただく予定です。詳細については、別紙プログラムをご参照ください。

<終身会員制度をご活用ください>

昨年度から実施している「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、西村頼男先生、村上清敏先生、渡辺憲司先生が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

<会費納入のお願い>

2015年度の年会費(一般5,000円、学生2,000円)の納入をお願いいたします。

口座番号 01300-0-93821
加入者名 文学環境学会
(フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ)

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様をお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、事務局補佐・辻(twain1910@gmail.com)まですみやかにご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

..... 広報より

広報担当では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブページに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をまいりますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の松永京子(kyokomatsunaga@mac.com)までお送り下さい。次回の更新は2015年11月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J 広報委員

喜納育江、河野千絵、松永京子

..... 編集後記

ニューズレター第38号をお届けします。本号は通常の8頁編集に戻ったとはいえ、「巻頭言」に始まり、「書評」、「エッセイ」、「院生組織だより」、「シリーズエッセイ」と、いずれもわたしたちを取り巻く重い課題を取り上げ、それを直視する必要を説く内容となっています。「水音」に始まり「パスー」に終わる本号は、環境とヒトとの本質的な親和性とその現在の姿をはしなくも語っていると言えるでしょう。こうした現状であるからこそ、文学に何ができるのかという青臭い問いは、それが青臭いからこそ、若手研究者の占有物にしてはならない、わたしたちがいまいちど想起すべき問いであるように思われます。

本号をもって編集委員の一部が交替する予定です。今後とも、ニューズレターが会員諸兄姉の闊達な意見交換の場となることを祈りつつ。(K・M)



【発行】
代表 管啓次郎
事務局 長岡技術科学大学 高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603-1
Tel/Fax: 0258-47-9805 (直通)
E-mail: tayako@vos.nagaokaut.ac.jp

【編集】
編集代表 村上清敏
〒921-8112
石川県金沢市長坂2-17-9
Tel: 076-243-7205
E-mail: mkiyotoshi@amber.plala.or.jp